

などの影響で値下がりした反動で、取扱高は伸びた。
 ホクレン帯広支所酪農課は「今後も乳牛の頭数がすぐに回復するのは難しく、価格も下がらないのでは。肉牛

も4月以降も価格は上がり続けており、高値で推移するのでは」とみている。

生乳生産 最高更新108万トン 2014年度十勝

2015年5月17日

ホクレン（札幌）がまとめた十勝（帯広支所）の2014年度の生乳生産量（生乳受託数量）は、前年度比0.9%増の108万6334トンで4年連続で過去最高を更新した。全道の多くの産地が前年割れし、消費地でのバター不足も発生する中、十勝は大規模化の拡大などで国内の供給を支えた。



大規模化も背景

牛乳や乳製品の原料となる「生乳」は一部を除き、道内はホクレンが一元集荷して、各乳業メーカーに販売している。

十勝の生乳生産量は、全国の約15%ほどに当たる。離農の影響や粗飼料（牧草や飼料用トウモロコシ）の不作で、昨年4～6月までは単月でも前年割れの傾向だったが、同7月以降は回復基調に転じ、同11月以降は累計でも前年を超えた。

ホクレンの全12支所の合計は前年度比0.8%減の373万280トン。累計で前年を超えたのは十勝の他、倶知安、札幌で、年間5万トン以上の主産地では十勝のみとなっている。

その他の主産地では中標津（根室方面）が前年度比1.4%減の77万9638トン、北見（オホーツク方面）が同0.6%減の55万8577トン、釧路が同1.8%減の51万8489トン。

十勝のJA別では法人の規模拡大が目立つ十勝清水町が同4.3%増の11万3095トン、鹿追町が同1.6%増の10万2196トン、大樹町が同2.9%増の9万3810トンなどとなっている。全24JA中、前年度を上回ったのは16JA。

ホクレンは「13年産の牧草の品質が悪くなかったため、上期は特に道東で伸びなかった。下期も前年比では良くなってきているが、前年が良くなかった反動もある」（生乳受託課）とし、道内の生乳生産は十分な回復傾向に乗っていないとみている。

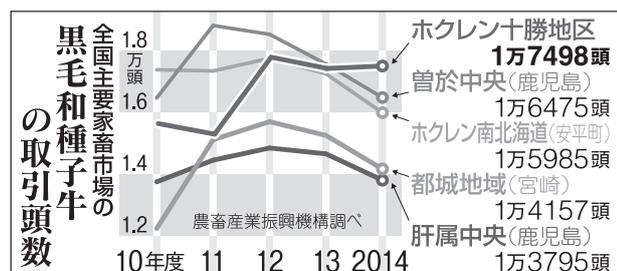
3月末の生乳受託戸数は十勝が前年同期比50戸減の1276戸、全道が同192戸減の5981戸と、酪農家の離農は依然として多い。道内より生産減少がさらに激しい府県を含め、今年度の国内の生乳需要を満たせるかは、不透明な状況となっている。

ホクレンの生乳受託数量

支所別・2014年度		
支所(地区)	受託量トン	前年比
帯広(十勝)	108万6334t	100.9%
中標津	77万9638t	98.6%
北見	55万8577t	99.4%
釧路	51万8489t	98.2%
稚内	27万9634t	98.8%
旭川	17万0435t	99.0%
留萌	10万6002t	95.0%
苫小牧	8万7054t	99.6%
函館	7万6492t	97.5%
倶知安	2万3423t	100.5%
札幌	2万2839t	100.1%
岩見沢	2万1363t	92.3%
合計	373万0280t	99.2%

黒毛子牛取引頭数 十勝が全国一 2014年度

2015年5月22日



農畜産業振興機構（東京）がまとめた全国の2014年度黒毛和種の子牛取引頭数で、ホクレン十勝地区家畜市場が1位になった。同機構がデータを保存している過去5年間では、十勝が全国1位になるのは初めて。全国の和

牛繁殖農家が高齢化などで離農する中、十勝が農家の大規模化や、乳牛に和牛を産ませる受精卵移植などで、国内の和牛生産を底支えた。

引取頭数 1万7498頭

黒毛和種は生後10カ月ほどの素(もと)牛を、全国の肥育農家が市場で買い付けて育てる。十勝は素牛の一大産地で、飛騨牛や米沢牛などブランド牛になる子牛も多く供給している。

全国で黒毛和種を扱う家畜市場は100を超える。ホクレン十勝地区家畜市場の黒毛和種は、十勝からの出荷が8割ほどを占め、一部は釧路や根室からも出荷される。